

氏 名	お だ じゅ てん 小 田 壽 典
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 502 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	トルコ語訳伝説天地八陽神呪経一卷の研究

論文調査委員 (主 査) 教授 庄垣内正弘 教授 濱田正美 教授 御牧克己

論 文 内 容 の 要 旨

トルコ語訳「伝説天地八陽神呪経」の研究は、羽田亨博士により大谷探検隊将来品中の長簡と二つの断片が読解され、あわせて漢語偽経の書誌学的研究が行われたのを嚆矢とする(羽田亨1913/1915)。これは、わが国の古代トルコ語出土文献学の端緒を開くものでもあった。ついでバング W. Bang 博士のもとでガバイン A. von Gabain 女史およびラフマティ(アラト) G. R. Rachmati (Arat) 氏がベルリン収集中の72種断簡と小断片多数を同定し、もっとも完本に近いスタイン収集品のロンドン本を底本となして校定本を刊行した(Bang 1934)。ガバイン女史(1954)はブラーフミー文字写本のなかにも断片一葉を同定したほか、さらに中国の馮家昇(1955)、山田信夫(1958)、庄垣内正弘(1979)、P. ツィーメ、百済康義の諸氏の断片発見に加えて、ラドロフ刊行物にも数点が含まれた。

論者は博士課程在学中の研究題目として研究を開始し、1966年に「ウイグル文トルコ語天地八陽神呪経の写本について」(野尻湖クリルタイ) 最初の研究を口頭発表し(『東洋学報』49-2, 132頁)、のちに、「トルコ語本八陽経写本の系譜と宗教思想的問題」『東方學』55(1978)の内容になった。なおレイ・リゲティ「トルコ語八陽経の周辺」(『トルコ学』叢書、ブダペスト 1971)から多くの示唆を得た。さらに、マニ教研究者のクリムカイト氏は『東方マニ教に関する日本人の研究』(東方諸宗教の研究紀要ヴィズバーデン1991)のなかで私の邦文をドイツ語に翻訳させてマニ教との関連に言及し、「中央アジアにおけるマニ教-仏教の横断結合」と題して高く評価した。そしてトルコ語仏教の翻訳文献の背景にマニ教の存在を強く印象づけることになった。これより先、イスタンブル大学留学の帰途(1967)に、東ベルリンの収集品を短い日時ながら直接調査した。その成果は、イスタンブル大学第2回国際トルコ学会(1976)そして同じく第3回国際学会(1979)においてトルコ語で発表し、さらにガバイン女史生誕80歳記念シンポジウム(ハンブルク 1981)において「トルコ語八陽経におけるインド来源用語について註釈」(英語)を発表した。また『古代オリエント学』(AoF) 10-1(1983)においてベルリン所蔵の新しい断片について言及した。龍谷大学大宮図書館に収集されている大谷探検隊将来品については「龍谷大学図書館蔵 ウイグル文八陽経の断片拾遺」(山川出版社 1983)、「龍谷大学図書館蔵ウイグル文八陽経の版本断片」(『豊橋短期大学研究紀要』4, 1987)として新しい断片を加えた。また近年ロシアのサンクトペテルブルク収集品のマイクロフィルム資料が東京の東洋文庫に所蔵されるにいたったのを機会に相当数の断片を利用しえた(仮カタログにおいて大部分はすでに同定されている)。その他、ベルリン収集品と京都の龍谷大学所蔵品に新しい断片がつけ加わったが、ペーター・ツィーメと百済康義の両氏に負うところが多い。とくに敦煌の元窟181号出土パリ収集品は百済氏の調査による。ここに取り上げられた本経巻に関する資料は、所蔵記号によれば、ベルリン収集品269点、大谷探検隊収集品(龍谷大学)37点、スタイン収集品1点、ペリオ収集品7点、北京収集品3点、サンクトペテルブルク収集品69点および東京書道博物館1点、ほか1点の合計388点におよぶ(なおこの中には所蔵不明のものが5点くらい含まれる)。經典の本文を構成するもの以外では、註釈書の断片と目されるもの2点、10断片ほどの識語またはそれらしいものを含む。

以上に述べたトルコ語出土資料にもとづいて、トルコ語訳伝説天地八陽神呪経一卷の復元を試みる。長期にわたる流伝・書写の経過においてトルコ語本文の字句は相当に変化した。その結果としてトルコ語本文の変遷過程を4段階(Ia, Ib, IIc,

IIId)に設定し、解説する。本文は初訳本(I)と改訳本(II)に分類される。初訳本と改訳本の題名は次のようである。

(I) tngri burxan yrliqamış tngri yirli sākiz yükmäk yaruq bögülüg arviš nom bitig bir täzinč 〈天たる仏陀が説きたる天と地と八集光なる神秘の呪経一卷〉

略称 sākiz yükmäk yaruq nom bitig 〈八集光経〉

(II) tngri tngri burxan yrliqamış tngri yirli sākiz törlüğün yarumış yaltrımış iduq darni tana yip atlG sudur nom bitig bir tägzinč 〈天の天、仏陀が説きたる天と地と八種をもって光り輝きたる聖呪、「墨糸」と名付ける經典一卷〉

略称 sākiz törlüğün yarumış yaltrımış nom bitig 〈八種をもって光り輝きたる経〉

いま本論に掲げる転写本文(99頁—195頁)をトルコ語訳仏説天地八陽神呪経の校訂稿本と名付ける。校訂本とするには未だ十全ではない。新しい写本・版本の発見によって補充されるべき余地がある。さし当たって本文の四種区分は歴史的変化の過程を示唆する。第一は初訳本で、敦煌藏経洞将来のロンドン所蔵写本(L=Ia), そのものの転写である。敦煌藏経洞の閉鎖を考慮すると、十世紀以前に年代設定ができる。おそらく巻頭を欠いて使い古しとなったものが保存されるにいたったのであろう。第二は初訳本に属し、トルファン盆地出土の京都所蔵写本(K1)である。写真のみで実物の行方不明写本(K3)は、この卷子本の冒頭一葉断片そのもので、両者を合わせると、ほとんど完本である(Ib)。交河城の比較的古い遺跡から出土したらしい。ほか幾つかの写本によって欠損を補うことができる。第三は改訳本である(IIc)。上記の本文のうち、題名を含む要所を改訳したものと認定できる。多くの写本断片を接合して復元が可能となる。本論で試みられた校訂稿本である。写本の数量からみると、トルファン地方でもっとも多く書写され、敦煌の元窟からも発見された。第四は改訳本に属する版本である(IIId)。刻工「陳寧」の名が刻まれるもの(B38, K5 ほか)とアーナンダ・シュリー刊本の識語をもつもの(B7), 両者は中国元朝期に属する十四世紀前半の刊刻と推定される。中国内で刊行されてトルファン地方のウイグル仏教徒に頒布されたのである。ただし全体の四分の一程度がこれまでに見つかったにすぎない。

上述四段階の文意は、第一から第二では、字句の削減によるイラン的思想ないしマニ教的表現の削除に意味があり、第三の改訳部分もマニ教との紛らわしさが仏教的用語に替えられているとみたい。第三から第四は意味上の変化はほとんどない。要するにこの本文の変化は、ウイグル族の天山地方への移住後、マニ教的傾向を弱めたり、あるいは仏教徒勢力が増大したことによる影響を反映する。トルコ語本文の言語的变化も相関している。第二段階における書写言語の過渡的状況や版本の後期的特徴は相応するようにみえる。本論は当該出土トルコ語文献の文化史的研究に有用であると信ずる。

そこで、上述四段階の本文を写本・版本の事実にもとづき、二つにわけて分析する。第一はトルコ語の課題、第二は經典の課題である。まず第一のトルコ語の課題として写本・版本の各資料とトルコ語の特徴について相関性を以下の項目にしたがい簡略にAとBのグループにわけて示す。

(1)年代的または方言的言語性質, Ny 言語(A)とY 言語(B)は前者が碑文言語、後者はウイグル仏典に通ずる。

A: Ia (L), Ib (K2)

B: Ib (K1+3), IIcd

(2)文法形態

①奪格, +dAn (A)と+dIn (B)の前者はオスマン語ほか、後者はウイグル仏典に通ずる。

A: Ia (L), Ib (K1+3, KV16)

B: IIc (B1, ほか), IIId (B38)

②具格の四重変化(A)と二重変化(B)の後者はウイグル仏典に通例である。

A: Ia (L), Ib (K2, B12, S12)

B: Ib (K1), IIc (B62, B70)

③後置詞の前における3人称所有の対格接辞+(s)In (A)と主格接辞+(s)I (B), 前者は碑文言語に例がある。後者はウイグル仏典に一般的である。

A: Ia (L), Ib (K3, B12)

B: IIc (B5, B8, B10, B11, B61, KV3)

(3)後期的標識

①音位転換 無 (A) と有 (B) は qurtul-/qutru- 〈救われる〉と ädrām 〈能力〉, 後者はウイグル仏典でごく一般的である。

A: Ia (L), Ib (K1, K2, B48)

B: Ib (K1, B12), IIc (B13), IId (B38)

②語彙の方言化 iyä(A)と igä(B) < idi 〈主人〉, A は比較的早期の方言化, 後者はそのさらなる方言化である。

A: Ia (L), Ib (K1, B12), IIc (B26, S10, S11)

B: IIc (B70), IId (B7, B38)

(4)語彙の特徴 im sam 〈薬療〉 (A) と ämžu/ämšu 〈供物〉 (B), なお A は古オスマン語にみえる。

A: Ia (L)

B: IIc / IId

(5)借用語ソグド的 (A) とトハ拉的 (B) はインド来源の仲介語形を表す。

A: Ia (L)

B: IIc

(6)漢字音「陽」 yang (A) と yo (B) は前者が漢字音の長安方言, 後者が西北方言の影響とされる。

A: Ia (L)

B: Ib (K1, B48)

以上の結果, Ia は一貫して A, Ib は A と B, IIc も A と B, IId は B に分類される。

トルコ語仏典文献について, より古い碑文言語と共通する特徴をもつ, NY 言語 (または方言) を前古典期と考え, そして歴史的経過のなかで Y 言語化した。古典期に多くのトルコ語仏典が含まれるとみられている。この説をすべて受け入れるものではないが, 初訳本は前古典期, 改訳本は古典期にあたる。初訳本のロンドン本 (L=Ia) は古オスマン語と共通する語彙ないし言語表現を有するとともに, 文法形態である奪格の出自を探る重要な資料となりうる。

次に第二の課題として經典の性質に言及する。ここでは經典の伝播, 系統, 変容, 識語等を取り挙げる。漢語本からトルコ語に翻訳されたものであるから, 当然漢語原典との関係を前提としなければならない。中国では「貞元新定釋教目錄」(唐圓照撰800年編纂 大正 55, No. 2157, 1017a29) において「偽妄亂眞」の章に登録されて正統的な大藏經に, その後ついに収録されることがなかった。わが国では真言密教の伝本と目されるものが, 大日本續藏經に収集され, 大正新修大藏經(第85巻)に入れられた。しかしながら正倉院文書のなかに書写に関するもっとも古い記録(761, 764)が存在し, 漢語本には敦煌藏經洞写本, 朝鮮版本, 越南伝本が現存する。敦煌藏經洞チベット音訳転写本およびチベット語訳写本, モンゴル語訳版本が知られる。さらに最近, 西夏語訳写本断片も発見されている。八世紀半ば前後までに中国で作られた偽經本であるが, いわば中国の仏教文化圏の周辺に広まった。しかも伝本の内容を比較検討できることは, トルコ語訳の原典, 原典の伝播, 翻訳の時期などについて有力な証言を得ることになる。本論では西夏語訳を除き, 敦煌チベット音訳転写本およびチベット語訳写本, モンゴル語訳版本を含め, 網羅的に字句の異同を表示した。その結果, トルコ語訳ともっとも親近性のある漢語原典は, 日本の古写本である東寺觀智院本(京都)・真福寺宝生院本(名古屋)となり, これらは上述の正倉院文書にみえる伝本である可能性が高い。また敦煌チベット音訳転写本ともよく一致するのである。なお敦煌藏經洞中に一点のみ漢語原典(B本:S500)でこの分類に入るものがあることは注目に値する。そしてトルコ語訳と敦煌藏經洞出土のチベット語訳との間にかなりの相違があることは, 漢語原典の相違を明確に示している。八世紀から九世紀にかけて吐蕃王国が敦煌を含む河西回廊を支配した。一方で草原ウイグル国はこれと激しく対立した状況の中で, トルファン地方を支配領域に入れ, その後(九世紀後半)に移住先となったその地方にトルコ語文化を開花させた。同じ敦煌の藏經洞に残されたトルコ語とチベット語の文献の間には直接に関係ないと考えてよい。

敦煌藏經洞中に残された漢語原典 A 類本とチベット語訳本の間には密接な関係がある。チベット語訳本は便宜上, 旧訳と新訳及びその他にわけられる。まずもっとも目立つのは敦煌の漢語写本 A 類に文節の欠落がある。しかもこの文節の欠

落はチベット語新訳にも共通する。しかしながらチベット語旧訳にはその文節の欠落はない。つまりチベット語旧訳の「漢語原典」には敦煌漢語写本 A 類以外のすべてに存在した文節がやはり存在したことを示唆する。すなわち敦煌漢語写本 A 類とチベット語新訳に共通する文節の欠落は敦煌に伝播したのちに起こったと判断されるのである。いま書写年代が記述された敦煌漢語写本 A 類は、十世紀の926年（P2098）、934年（S5373）、942年（S6667）と988年（P3759）などが知られるが、これらとチベット語訳写本を比較してみると、その新訳とよく一致する。チベット語訳の時期は敦煌のチベット支配期内、つまり9世紀前半までに敦煌へ伝えられた漢語原典からチベット語訳が行われた。その系統のものが十世紀まで、いくらかの文節の欠落を起こしたけれども継承された。これとは別に、チベット音訳転写本は吐蕃王国の河西支配の早い段階でチベット人に伝わった可能性が大きいとみられる。

敦煌の蔵経洞にトルコ語文献が残されたのは、九世紀に河西地方から吐蕃勢力が後退し、ウイグル・トルコ族が新たにその方面に移住しはじめた結果にほかなるまい。おそらくこのトルコ語訳の翻訳地は敦煌ではありえない。安史の乱（760年代）後、吐蕃王国は河西回廊に進出しはじめ、長期（786-848）にわたってトルファン地域の漢人社会は本国との交通を遮断された。草原のウイグル国経由でやっと本国との交通ができたことを中国の史書は載せる。おそらくかなり早い時期にトルファン地方へ伝播した漢語原典からトルコ語に翻訳されたと考える。その漢語原典が日本古写本やチベット音訳転写本にもっとも親近性があるとすれば、その理由は同時代性に求められるかもしれない。漢語本がトルファン地方へ伝わっていた証拠は、ベルリン収集品の中に断片が残るが、十分な比較に堪えない。ただし朝鮮本のみに校異が一致する断片もある（Ch 366v）。日本の奈良朝へ760年代にすでに伝播していたのであるから、トルファンへも八世紀のうちに伝わった可能性は十分あると思われる。

トルファン地域は九世紀、新しいウイグル族の移住以前から草原ウイグル国の支配領域に入っていた。おそらく東からの漢人文化と西からのソグド人ほかの西方文化との混成、あるいは多民族多宗教の共同共生社会が存在しえた。支配者のウイグル国に当時マニ教が優勢であったにちがいないが、この地方に伝統的な仏教がまったく逼塞していたわけでもあるまい。ウイグル国支配の増大とともにウイグル人自身の文化的、知的要求が芽生え、少なくとも漢人社会とソグド文化のトルコ化トレンドのなかで、マニ教とともに仏教的知識がトルコ語社会に受け入れられるようになったのではないだろうか。

八陽経ロンドン本には前古典期といわれ、あるいは Ny 言語（または方言）と名付けられる、碑文言語と共通の言語特徴がある。さらに十五、六世紀のオスマン・トルコ語と共通する語彙が見出され、のちのウイグル語に見つからない単語が存在する。この事実をどのように理解するかは今後の課題である。トルコ語の言語的性質から八陽経に類似するものは、法華経、とりわけ観音経のトルコ語訳であり、さらなる包括的研究を待たなければならない。

最後にトルコ語訳の原典となった漢語本について触れると、トルファン地方へ伝播しトルコ語訳に利用された漢語原典は現在知られるもっとも古い出自の一つであろう。このことは本研究の成果であることを明記しておきたい。

なお本論の資料編はここで研究対象としたトルコ語写本・版本の全音訳転写資料、チベット語訳転写資料とモンゴル語訳転写資料である。チベット音訳転写の漢語資料は高田時雄氏の研究に含まれるので、掲載は省略した。

論文審査の結果の要旨

チュルク語（論者トルコ語）訳「仏説天地八陽神呪経」の研究は、1913年に羽田亨博士により大谷探検隊将来品中の卷子本断片と二つの小断片が同名漢文に同定され、24行文のテキストが提出されたのを嚆矢とする。同博士は1915年に全テキストを出版した。ついで1934年に W. Bang 氏がベルリン収集品中の小断片多数を同定し、A. Stein 収集品のロンドン本を底本として校訂本を刊行した。その後中国や日本からもあらたな断片が発見され各研究者によって出版された。

論者は1966年にこのチュルク語仏典の研究に着手し、現在に及んでいる。その間にベルリン収集品、大谷探検隊収集品、サンクトペテルブルク収集品など合計388点の断片類を調査した。その中には論者自身によって同定されたものも含まれている。

本論文は本編（和文 A4 判、305頁）、資料編（A4 判、341頁）の二冊から構成されている。本論は主要な二つのテーマをもつ。第一はこのチュルク語仏典の解説と校訂テキストの作成、第二は校訂復元されたチュルク語訳本と漢語原典、チベット語訳、モンゴル語訳との比較研究である。

第一のテーマにおいて論者は次のように論述する。まず、このチュルク語仏典は長期にわたる流伝・書写の過程においてチュルク語文に大きな変遷を経験した。その変遷を4段階（Ia, Ib, IIc, IId）に分類することができる。第I段階には初訳本が、第II段階には改訳本が所属する。第I段階のIaには敦煌莫高窟第17の藏経洞から発見されロンドンに将来された写本が、Ibにはトルファン盆地から出土し龍谷大学に保管されている写本が所属する。この2写本はいずれも完本に近い。改訳本中の写本断片類も繋ぎ合わせることによって完本に近い形に復元でき、それはIIcに所属する。IIdには版本からの印刷文断片が所属する。印刷文は数種類からなり元朝期（十四世紀）に中国内で刊刻されたと推定できる。改訳本の写本と版本との間に大きな差異はないが、初訳本の敦煌本とトルファン本との間には随所に字句の増減がみられる。そして、初訳本と改訳本の間には音韻、形態、語彙面における大きな言語特徴の違いがある。

このように論者が言語特徴に基づいて変遷過程を4段階に分類し、それらに所属する文献類を特定したのは妥当な判断であり、評価できる。敦煌の藏経洞から将来されたロンドン本は十世紀ないしそれ以前に遡る可能性があり、版本は十四世紀に所属するので年代差は5世紀にわたる。すなわち「天地八陽神呪経」は我々の知るウイグル語のおよそ全時代にわたって連綿と書き継がれた仏典といえる。

さらに論者は、ロンドン写本の言語特徴がハミルトン氏の発見したオスマン語の祖語にあたる語彙や形態的特徴を含み、一方でガバイン氏の提唱した古代チュルク語 Ny / N 方言に属するとするなら、東方方言のウイグル語とは異なる言語的基盤がそこにあったという新しい問題を提起することになると述べる。

しかし、オスマン語の祖語にあたる語彙や形態的特徴を含むという論者の意見は必ずしも的確とは言い難い。確かにオスマン語の語彙や形態と類似する特徴がみられるが、その特徴はまた中央アジアやアルタイ地域のチュルク語にも現れる。ただ、論者が典型的なウイグル文語とは異なった特徴の存在を指摘した点は評価できる。

また、論者は初訳本と改訳本の題名に相違のあることを指摘し、この二つの題名が、異なる経典を示すのではなく初訳本のいくつかの要所を書き直して作られた改訳本に別名として与えられたものにすぎないと推論した。この指摘と推論は妥当なものであり、高く評価できる。

本論の第二のテーマはチュルク語校訂復元本と、漢語原典、チベット語訳、モンゴル語訳との比較研究に関するものである。とりわけモンゴル語訳末尾の識語からこのモンゴル語訳が元朝第10代帝師リンチェン・キラシスの時代（1329年12月～1332年3月）に版刻・流布されたことを明確にしたのは評価できる。チュルク語訳本と漢語原典との比較対照においては日本古写本（東寺観智院本など）ともっとも共通性が大きく、敦煌漢語本とは一致しないことも明らかにした。チベット語訳本については6種の写本を扱いテキストを提出した。いずれも緻密な作業として評価できる。

40年に及ぶ論者の「天地八陽神呪経」の研究は既に20本を越える論文として提出され、国際的にも高く評価されている。全体をまとめ上げた本論の完成はチュルク学において待望久しいものであり、その出版がこの方面の研究に貢献するところは極めて大きい。

しかし、本論にも欠陥はある。書かれたチュルク語が典型的ウイグル文語とは異なった言語特徴をもつことを理由に非ウイグル語と定義したのは言語学の方法からみて適当ではない。むしろ早期ウイグル語の一変種と考えるべき性格の言語である。また、先行研究の成果を明確化せずに議論を進める傾向の見られるのは少し残念である。しかし、このような難点は容易に改善できるものであり、本論の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2006年1月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。